

第8号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十二年十一月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしずく

大西亥一郎

※アラトス(Alteios)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍した。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・柳歌・短歌・俳句・川柳）・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長

大西亥一郎



目次

殺し屋の住人……大西裕子	1
孫を見送る父親の寂しさ……小川悦子	5
箏の先生と尖尾鳳 2010・7……伊藤雪山	7
タイムマシーン……永井組若芽	12
カラの空のその先に……大西裕子	15
夕暮れのベンチで……高阪博一	18
雲……令月	24
君といた夏……明花	26
十五夜三句・孤独……大西隆史	27
続 りーくんと月・たからもの……ゆきんこ	31
俳句（春うららー君の温もり）……夏子	34
俳句（蟬時雨）……彩華	36
（日記）……柴小路秀磨	38
ー競演 あきー	42
想うはあなた一人……令月	45
秋晴れ……大西亥一郎	51
秋のさまよい？……高阪博一	57
ひとこと、ふたこと、みことに よこと……大西亥一郎	62
編集室から	

殺し屋の住人

大西 裕子

漆黒の闇が支配する夜だった。

夏特有の湿った空気が自分の頬や首筋を撫でていき、じんわりと汗が浮かんだ。腕に張り付くような空気と、先程の感触を払いたくて水道の蛇口を思いつき捻った。

水を限界まで出し、両手をいつもは感じないほどの水圧の中に押し込め力の限り擦った。

指の関節

指の腹

指の付け根

手の甲

手のひら

爪の間

手首

全てを忘れたくて……先程の自分がした行為を無かった事にしようと、必死に手を洗った。それでも、手からあの行為の感触が消えることはなくて、頭があのか景を忘れてくれることはなくて、気持ち悪さに喉の奥から何かが

込み上げてくる感覚さえした。

殺した

その一言の現実だけが目の前にあった。

殺したんだ…また、殺してしまったんだ。

手があの感触を覚えていて…体を潰した感触を覚えてる。

頭が忘れてくれない…奴を追い詰めて殺した光景が消えない。

殺すのは何も初めてじゃない。それでも自分の手を汚すことは極力避けてきた。

ある時はターゲットの居る部屋にガスを充満させて殺した。その時は楽だった。死に逝く奴の顔も、苦しみでもなく姿も見ることがなく、ただ無表情でガスが充満する部屋を外から見ている。自分の手を汚さなくて済んだという安堵感があった。

ある時は罊を張ってターゲットが掛かるのを待った。奴の好みを調べ、行動パターンを把握し、確実に掛かるであろう場所に罊を仕掛けた。数日後に罊に掛かった奴を見て、顔を歪めながらも、闇に葬った。可哀想などという感情はなかった。でも自分の行為が正しいのだと思いつつ、吐き気がこみ上げたのを覚えている。

そして今日…自分の手で殺してしまった。心なんてなかった。

———殺さなければ

そんな心しかなかった。部屋に入った瞬間に出くわしてしまったことを後悔すればいいんだろうか。否、自分の部屋に敵が潜んでいたという事実がはつきりと分かった事を喜ばいいんだろう。けれど、突然の顔合わせに戸惑いかなかったわけではない。それでも体は染み付いてしまった反射神経で手近にあった武器を掴み、奴を追いかけた。部屋の中を縦横無尽に逃げ回り生き延びようとする奴を、憎しみの籠った目で追いかけた。部屋の隅まで追い詰めた奴に、力の限り武器を振り下ろした。

一度目の攻撃で奴は動かなくなった

二度目の攻撃で奴は死んだのだろうか

三度目の攻撃で奴の体は潰れだしたのだろうか

何度殴ったのかなんて分からない。ただ我武者羅に振り下ろして殴っていた。気が付けば部屋の隅で奴は体を潰されて動かなくなっていた。その光景を自分は肩で息をしながら見下ろしていた。

少しずつ呼吸が整つてくると、ようやく状況理解が出来た。自分の手に握られた武器と目の前で息絶えた奴。その光景に、今まで感じたことのない吐き気がこみ上げた。それと同時に、自分の手と頭が奴を殺した感触を神経に伝えてくる。潰れる感触と音が知覚と聴覚を侵す。自分の手が汚らしく思えて、走って台所に駆け込んだ。水道の蛇口を挟じ開けるように捻り、迸る水で手の皮が剥けるくらい擦った。あの生々しい感触を忘れたかった。手に染み付いた感触はなかなか取れなかった。何度手を洗おうとも、石鹸をつけて擦ろうとも奴を殺した感触



が消えなくてイライラした。部屋の隅で未だに転がる奴の姿を見て更なる怒りと吐き気が募った。いつそ吐いてしまえば楽になるのではないかと思い、台所の流しで我慢することなく全てを吐き捨てた。それでも心の中の闇は晴れない。

自分は間違ったことはしていない…。

そうだ、間違っていない。

自分の領域を侵した奴が悪いんだ…あいつが部屋の中にいなければ殺しはしなかったのに。

自分の邪魔になる存在を消して何が悪い…誰も自分を咎めはしないはずだ。

この世は弱肉強食なんだ…自分は勝ったんだ。

頭の中で幾ら言い訳を並べ立てようとも、自分の神経がまいつているのは確かだった。ここ数週間、何度も奴等と対峙しては殺してきた。自分の手を汚したくない自分が、自分の手を使って殺してきた。今思えばよく生活が出来たと自分自身を褒めたい気持ちで一杯だ。もうこれ以上は無理だ。これ以上奴等と顔を合わせたくない。殺し
たくない。

そう思った自分はポケットに仕舞っていた携帯を取り出して電話をかけた。

これ以上、ゴキブリが頻発する部屋に住んでたまるかと、部屋の隅でつい先程退治した奴の姿を一瞬だけ見て目を閉じた。

孫を見送る父親の寂しさ

小川悦子

お父さんが亡くなって13年目を迎えます。いつも心の中で生きてるので、そんなに月日が経ったとは思えません。町で似た人を見かけると、今でも振り返りたくなります。この前もバス停で、お孫さんを見送っていらつしやる人を見かけた時、昔を思い出し胸が熱くなりました。

実家に帰ったときはいつも駅まで見送りに来てくれましたね。孫ができた今、お父さんの見送る寂しさがわかるようになりました。

そうそう、かわいがってくれていた4人の孫たちもそれぞれ大人になり、自立しています。この姿をどこかで見てくれていることでしょう。孫が生まれてからお父さんにし

てもらったことを、また孫にしています。お父さんの思いと重ね合わせています。
私も年をとりました。そう言えばお母さんも以前よりずっと年をとりましたが、元
気でいますから安心してください。みんなで大事にしています。

九月二五日神戸新聞 発言の投稿



箏の先生と尖尾鳳

2010.7

伊藤 雪山

琴の丁先生から鉢植えをもらった。「先生、血圧は高くない？これ、もつて帰る？」一瞬、唐突だったので、何か中途半端に「はあ、もらつて帰ります」と私は生返事をした。私は、定期演奏会に出演のための練習で丁先生の家へお邪魔していた。箏と尺八の下合わせの練習が終りその帰り際、玄関先のできごとだった。彼女とは、一年に一回逢うか逢わないかの間柄である。その彼女は私のことを先生と呼んでいた。今から五年前の話である。

観賞用ではない「鉢植えの木」は彼女の話によると葉をちぎつて食べると高血圧に効くというのである。彼女本人が血圧が高いのか、ご主人がそうなのかは訊ねようとは思わなかった。「何と云う植物？」と訊ねると、「娘に聞いたらかるんだけど…。」

歩いて十分ほどの近くに娘夫婦が住んでいる。その娘がかつてインドネシアに旅行したときにその効能書きと合わせて、持ち帰ったものだったことを知った。高齢者のぶるいに属する私は血圧のことは日頃から少々、気にはなっていた。かかり付けの医者にも月一で例の水銀血圧計で測ってもらうがその時は、きまつて、「いいですね」言われ特別どこいわれたことはない。しかし、私は時々、自宅に備え付けの簡易のオムロン血圧計で測るが、時にとんでもなく、高血圧の数値をしめす。180の下が108。しかし、いつもそうでないからこれはやつかいである。薬を飲むべきか、飲むべきにあらずか。昔、別の医者に相談したことがあった。この手の薬は一度、飲み始めたら、ずっと続けなくてはならないという意味のことを聞いたことがあった。ますます厄介なものである。

そんなわけで、ただ高血圧の傾向にあるということで、以来、毎朝、玄関先において鉢植えの木の葉をちぎって口にしていたのである。その効果は定かではない。そうして、半年ぐらいいしてから、その鉢植えの木が枯れてしまったので、電話したことがあったが話はそれっきりになつて忘れていた。

琴のT先生との最初の出会いというと三十年前に遡るから私が当時四十歳位のころである。T中学校に勤めていたのだがたまたまPTA教養部担当教師で彼女はその時、PTAの副会長二人制の内の一人だった。当時、PTA研修旅行というのがあつて、その下見と称して会長をはじめ関係役員5、6人が連れ立って電車であじさい寺で名の通つた矢田寺に出かけたことがあつた。そのとき梅雨期の小雨の中、お寺の境内に咲いていたアジサイの花の紫色が映えて殊の外みごとであつたことと、それにも増して電車で出かけたというのが今から思えば殊更風流であつたので記憶によく残つていた。以来、彼女が箏の先生であることを知つた。私はそのころは、尺八はまだ習い始めたばかりの頃だったので、指導をうけながら職場の退職者の送別会の余興でお手合わせしてもらつたことがあつた。

その後、ときに定期演奏会などで合奏することがあつた。そんなとき顔を合わせれば、明るく、屈託の無い笑顔で親しく挨拶される感じのいい人だったことが印象にある。

定期演奏会の箏と尺八の組み合わせは、十人位の幹部会役員がいて、その会で決定される仕組みになつている。彼女は筑紫流の大師範の先生である。因みに私は今は尺八の師範である。ここで、述べておきたいのだが、尺八でも大師範というものがあつて、私は、とつくの昔に大師範の免状は戴くことができたのだが、自分の都合でもらつていないだけのことである。時に周りの人から「尺八を教えるのですか」と訊ねられる。大師範をもらつたからといって、いまさら、尺八教室を開く積もりも無い。因みに、免状代は紙一枚で十五、十七万円位、そのうち、一割は、かつて、昔習つていた師

匠のところへ、あとは、京都の新都山流宗家へ収められる仕組みになっている。尺八の値段も結構なもので竹一本で、私のもっているもので七十五万円はするものもある。平均三十五、四十万円のものが多い。少なくとも十数本は購入してきたから、出費は総額かなりのものである。箏を習う場合も趣味の程度でとどめる場合は別だが名取までとなるとかなりの出費になる。芸事の世界でも金ばつきものであるし、ややこしいしきたりもある。若いとき勤め先で「ころえ」とだけどなあ」といっては部下の私に時に親身に指導してくれる上司がいたが、物事のしきたりは知っていて、得をすることは沢山或る。知らなくて、恥をかくこともある。

話をもとに返そう。

今回、小野市うるおい交流館エクラホールで邦楽定期演奏会があつた。

今にも開場のときを向かえ、出演者は準備のため舞台裏の楽屋通りの狭い通路を行ったり来たり、挨拶もあわただしく交わしていた。そんな狭い通路の中、くだんの箏の先生と出合った。久しぶりの出会い頭に「先生、これ引っこ抜いてもつてきたよ」と、私は彼女から突然、声を浴びせられた。いなせな歯切れのいい言葉だった。「引っこ抜いて」という呼吸のよさ、響き、それは何かいい表わし難い、新鮮で涼やかなモーツアルトの曲を聴くがごとく心地よいものだった。そういえば、以前の「鉢植えもつてかえる？」のときもそうだった。あとから考えてみるとそれは彼女に身についた楽しくて、人を喜ばせる得な習癖のようなものだった。



目の前に差し出された小さな透明なビニール袋の中身は、みどり色の植物の苗らしきものだった。すぐに例の植物だとわかった。彼女は以前のことをすっかりと覚えていて例の「鉢植え」の植物の苗を持ってきて、目の前に差し出したのだった。そのビニール袋のなかには苗木と一緒に「尖尾鳳」とマジックで書き添えた紙切れが入れてあつた。やつと名前がわかった。だがどう読むのか解らない。軽い少しの会話のあと彼女は「なんと読むんだろうね」といつた。文字だけは見えるが、どう読むのか、彼女もわからないらしい。わたしは「また、後で」と、その場を離れ、本番前のリハーサルのためステージへと向かった。

演奏会がすべて終了した後は恒例の懇親会がセツトされていた。総勢四十数名が集まってきた。偶然にも彼女とトイメンに対座した。というのも、実は私のほうから、手招きして、同じテーブルに誘ったのだった。久振りに、当時共にPTA活動した頃の懐かしい話や近況報告を織り交ぜながら周りの仲間を巻き込み楽しい時を過ごした。

これも、今、林住期にいる私の「他を思え、思われる」を感じながら老いてこその上機嫌のひとつままと考えた。しつかりと感得しようと自分に言い聞かせた。

以前、わからなかった名前の文字は「尖尾鳳」と書くが、読み方は分からない。私は興味津々、帰ってから早速ネットで調べた。だが、インドネシア語、中国語らしき文字が突然画面いっぱいに現れた。「えっ！ 何、これ？」私には皆目意味がわからない。ただ、一つわかったのは、それは「葉草」で「冷血」という文字だった。早速に裏の畑に植えた。根づくことを期待した。

その脇には数週間まえタネを蒔いていた朝顔の葉がすでに大きくなって、つるが伸びはじめていた。因みに、この朝顔の葉も実は葉草である。志賀直哉の「朝顔」で読んだことがあるが試したことはない。

「尖尾鳳」を絶やさないようにしたいものだと思った。それにしても、本当に高血圧に効くのだろうか。あまり聞いたことこない、見たこともない文字の「尖尾鳳」である。医者に尋ねるときつくクレイムがつきそうだが。そのまえに医者は「尖尾鳳」など知らないのではないだろうか。でも先生の試し済みのものだから間違いない、きっと効能はあるだろう。この読み方も解らない植物は、以来自分にとっては、彼女のあの「ひっこぬいて」の言葉と合わせて不思議な植物になったのである。その植物も今ではやつと根付いて、葉も大きく育ちつつある。

後日、T先生から書簡が届いた。(2010・8・16)

実は懇親会のときに約束したのだったが、私が趣味で書き綴っている小冊子を送った、その小冊子を読んでの感想を書簡でよこして来たのだった。

私は、またいつかどこかでお遭いしたときに話題にしていたただけたらそれでいいと思っていたのだが……。残暑お見舞い、厳しい暑さ、体調伺い、定期演奏会のこと、主人が写した写真添付、そして少しのコメントだった。

私の方は、読む人にフィットしたかどうか気がかりの部分だった。押し付けだったから。でも、何よりも、読みやすく、面白いと思っていたいた分よかつたなと思った。

最後に、「ところで、尖尾鳳はうまく根ができましたでしょうか。ついたら随分大きくなっていることでしょう。」とあった。

タイムマシーン

永井組若芽

知から智へ

僕には忘れられないことがあるんだ。

高校2年の3学期。生徒会の会計だった僕たちは、クラブの予算折衝をしたね。予算の総額が減ったことが原因で、どのクラブも昨年より一律10%カットすることを決めて、折衝に取り組んだんだ。

僕は野球部担当で。当時兵庫県大会ベスト8まで勝ち進むようなチームで、誰もが認めるほど気を吐いて練習をしていた。野球部の敏腕マネージャーと呼ばれていたTさんとの話し合いで、部員の情熱に胸を打たれた僕は要求していた予算の満額を決定した。

会計の部屋に戻るなり、会計仲間で決めた10%カットのルールを破ったことを、智に責められ

たんだ。他のクラブとの公平さに欠けるつて。しかも「Tさんの魅力に惑わされたの？」つて、とつちめられた。

いつも君は、僕が何かやろうとするたび「大きな壁」になつて立ちはだかつていたような気がするよ。

おまけに僕がもらつたバレンタインのチョコレートを「Tさんにもらつたの？」 買収された？」つて。

だから今日はTさんに謝つて。「誤解していました」つて。

実はあのチョコレート、会計担当の先生がこっそりくれたもので、智が僕のチョコレートをみてどんな反応するか、試してみたんだ。

智から知へ

うん、予算折衝したね。私は水泳部担当で、鉄アレイ1セットだけの予算を付けた。

でも、敏腕マネージャー・Tさんの存在さえ覚えてないのに。あなたが言うような発言をしたこ



となんて、記憶にないわ。

まあ、高校生の頃の私なら、決めたルールを守らないあなたを「正義の御旗」を振りかざし、責めたと思う。私はきつとそんな女の子だった。

さもありなん、さもありなん。

それにしても私が「壁」だったなんて。高校生の頃からあなたは、本質を見極めたいと考えているような人だったから、私なんかが太刀打ちできる存在ではなかったのに。

あなたの話を聞いていると、その時、私は知、あなたに「恋」をしていたの？

同窓会の２次会で、薄めの水割りを飲みながら、ときれときれの記憶をつなげてみようとしたけれど、無駄な努力だ。

漢字は違っても名前に「とも」という同じ音を持つ私たちは、高校生のころ互いに好意を持っていたのかもしれない。

三十年以上たつて初めて気付くことだつてある。

浦島太郎は玉手箱の煙で、現実の自分に戻るけれど、同窓会は「その時代に」に戻るタイムマ

シーン。そう光の速さより早い。

一瞬。

そこにはなつかしいという感情だけではない、どこか新鮮な感覚も同時に押し寄せる不思議な時間と空間。

今度は、どんな煙に巻かれてみようか。

カラの空のその先に…

大西裕子



何かをずっと求めていた
その何かが何かなんて
何も分からなかった
ただ求めなくちゃいけないと



空っぽの心が言っていた

黙って見上げた空は

心の苦しみなど知らず青かった

何処までも青いその空は

あの人のところも同じなのだろうか

空っぽの瞳が想像した

気ままに吹きぬける風は

涙などに気付かなかつた

それでも慰めるようなその風は

あの人の心も癒してくれるのだろうか

空っぽの耳が訊ねた

気持ちに気付かぬ太陽は

黙って自分を存在させる

どこまでも自信に溢れるその光は

夕暮れのベンチで

高阪博一

百日紅が咲いている。枝の先のほうに赤子の頭ほどもあろうか、大きな塊の薄い桃色の花をつけている。細い枝がたわんで、熱い風に物憂く揺れている。皺のないつるつとした薄茶色の幹が光を反射して白く見える。今年の夏は異常に暑い。嘗て、経験したことのない暑さだ。

家に居るとやたらと汗をかくが、陽の高いうちは外に出る気にならない。一日数千歩を日課にしている老躯にとつて、歩く時間帯は限られる。早朝歩けば良いのだが、『遅そ寝、遅そ起き』の身には無理というものだ。若い頃からの生活習慣がなかなか変えられない。意志薄弱そのもののなのだ。

午後五時の半ばを過ぎた頃に歩き出す。暑さの余韻はまだまだ残っている。二十分もすると汗が噴出して、Tシャツが肌にひっついてくる。運動不足を痛感しつつ、いつものあのベンチを目指して、一人で黙々と歩く。

大きな楠木の下にそのベンチがある。一周七・八百メートル程の外周の中に、芝生やクローバーなどの緑地があり、楠木や合歓の木や紅葉、大小いろいろな木が木陰を造っている。そのベンチに坐っていると、季節の移ろいを感じることが出来る。春は梅や桜の華やぎ、秋は紅葉の鮮烈さ、冬は枯れ枝を通り過ぎる風の寂寥、そして、夏は木陰の清涼を。

いつものように、ベンチに坐り、一息つきながら、向こうの方に咲いている百日紅をぼんやりと眺めていた。重たく熱い風が何となく軽い風に変わってきた。汗が徐々に乾いていくのが分かる。甲高い鳴き声が聞こえたような気が

した。じつと見てみると、小さな黒い巻き毛の犬が飛び跳ねながら現われた。その犬を追うように、あの女がゆつくりとした歩調で枝の間から姿を見せた。

いつも同じような時間帯に歩いていると、同じ人たちによく逢うものだ。特に挨拶を交わすこともなく行過ぎてしまふのだが、妙に記憶に残つてしまふ人もいる。特徴のある歩き方、特徴のある風貌や雰囲気、それはさまざまだ。すると、あれこれとその人たちのことを考えてしまふ時もある。その女もそんな一人だつた。

十日程前にこの外周路ですれ違つた。身長は百六十センチ前後で、ほっそりしている。暑いのに、手首まである白いシャツに、薄いデニムの長いGパンを穿いていた。連れていた犬が私を見て細くて甲高い声で吠えた。「すいません」とその女が私の方を見た。狭い額に大きな二重の眼、小さな鼻梁に締まつた口元、化粧気はまつたくない。「この子、時々吠えるんです。申し訳ありません」と恐縮するように言葉をつないだので、「いいえ、いいえ」と言葉を返した。そのまま、すれ違つて行つたのだが、何となく淋しげな表情が妙に心に残つた。次の日も出会つた。早く歩かうという意思は全く感じられないし、別に周りを見ようともしていない。ただ、頭を下げ気味に歩いているだけだ。リードで繋がれた犬は決してその女の前に出ようとはせず、傍らを歩いているのだが、どことなくその犬に引かれているような姿が気にかつた。もう、小さな黒い犬は私を見ても吠えようとはしなかつた。

犬がその女を見上げている。何かの合図を待っているようだ。手に何か持っている。小さな黄色いボールのようだ。それを投げた。一目散に犬がそれを目がけて走っていく。口に咥えて帰ってくる。そのボールを取り上げると、犬は後足に力を込めて、真上に飛び上がる。黒い小さな塊が何度か空中に舞い上がる。もう一度投げる。同じように犬が駆けていく。今にも荒い息使いが聞こえるようだ。それを笑うでもなく数度繰り返し、その女は緑の草の

上に腰を下ろす。犬も足を投げ出し、腹からべつたりと草の上に横たわっている。頭から背中にかけて黒い巻き毛の間を白い指が優しいに動き回る。ふと、あの女はどんな人なのだろうと思つた。

年齢は三十代後半のような気がする。女性の年齢はなかなか分からない。化粧や服の感じで変わってしまう。だが、化粧のないラフな感じの服装から、その年頃に違いないと思う。そんな年齢の人がこんな時間帯に、ほぼ毎日犬と散歩している。何か仕事をしているのだろうか。販売か？ 似合いそうもない。軽作業か？ それにしては華奢な感じがする。事務か？ 黙つて無表情にパソコンを使っている姿はどうもぴんとこない。仕事はしていないに違いない。

普通に考えれば結婚し、家庭に落着き、小学生程度の子供がいる年頃だ。それなりの満ち足りた表情になりそうなものだが、どうして、あんなに淋しい表情を漂わすのだろう。家庭内に何かトラブルがあるのだろうか。そうだと、反抗期の子供に手を焼いている。まだまだ他に考えられる。一緒に住んでいる義母との確執、よくあるケースだ。それとも、夫婦間の倦怠、そうだと、これに間違いない。

結婚して十年近くになると、夫婦も昔のことを忘れてしまう。結婚前はあんなに声が聞きたかつたのに、あんなに逢いたかつたのに、別れて一人になり、その淋しさにどうしようもなくなつて、また直ぐに逢いたいと思つたのに、夫は仕事から帰宅し、玄関を開けると、「まだ、家に居たんだ」と思い、妻はその顔を見て「また、帰つてきたんだ」と思う。悲しいそよ風が二人の間を吹きすぎていく。

突然、小走りの老人が眼に入り、前を横切つて行く。苦しそうな表情、ハーハーという息使いが聞こえる。老齢でも走る人は多い。楽しいに走っている人は少ないような気がする。眉間にしわを寄せ、不幸を一身に背負つた感

じの人が多い。マラソン競技をしている訳ではないのに、ああまでして、何故走るのだろう。怠惰な私には到底まねの出来る芸当ではない。

団塊世代以上の人は何をするにも、ストイックでどうも余裕がない。ヘラヘラ笑う必要はないが、喘ぎながら走るより楽しそうに走ったほうが見た目にも綺麗だ。本人にとつては楽しみなのだろうが、見せられているこちらは、いた堪らない気持ちになつてしまふ。見ないようにすればそれまでなのだろうが、ついつい見てしまふ。「身体、大丈夫やろうか？」と老婆心が起こつてしまふ。

あの女が立ち上がる。犬もそれに促されて起き上がる。犬にリードをかける。私の坐っているベンチの方向に歩き出す。傍らを離れることなく従う黒い小さな塊が、足元にじやれついたり、膝元に飛びついたりしている。

あの女は夫婦のことを諦めてしまつたのかも知れない。興味は子供のことだ。女には子供を生んだ実感がある。あの生みの痛みは経験のない男には到底分からぬものだ。だから、それだけ愛情も深い。子供の世話を焼く。小さいうちは親の言うことはきくが、小学生ともなると言う通りにはならない。愛情から出ていることだが、言うことをきかぬ子供に苛立つようになり、つい声を荒げてしまふ。子供は一層反発する。こんな悪循環に陥っているのかも知れない。

いや、子供がいなくても考えられる。結婚して十年近く、子供が出来ない。それなりに努力はしているものの、やはり出来ない。『子は鎹』^{カヌカイ}というがそれが無いのだ。そうすると、所詮、夫婦は他人、壊れてしまふのも早いかもしれない。徐々に会話が少なくなってくる。子供がいないので、一層少なくなつてしまふ。「ふん」、「そう」程度の受け答えだけ、食卓で聞こえるのは、箸の音と茶碗を置く音程度になつてくる。一寸したことを誤解し、その誤解が

会話のないことで更に誤解を生む。まさに、誤解スパイラル、溝は深まるばかりで埋めようがなくなる。そうなる
と、すつぱり別れてしまえば良いのだが、ぐずぐずと一緒に暮らしている。女と男、いろいろ打算もあるものだ。

その女^{ヒト}が私を見止めて小さく頭を下げる。

私も頭を下げて、「この犬、何という種類ですか」と聞きながら立ち上がる。「トイ・プードルという種類です」と
低い澄んだ声が聞こえる。「小さいんですね、まだ子供ですか」と問うと、「もう、七歳になります。人間でいうと四
十後半でしょうか、口の周りが白くなりかけています」と言いながら、「私より、十ほど年上です。そろそろ姥桜。
盛りは過ぎましたね」と意味ありげに、悪戯つばく笑う。

犬がこの言葉につられたように私を見上げている。くりつした小さな瞳、ちよこつと付いている濃い茶色の鼻、あ
ごの下に灰色がかつた毛が見える。頭を撫でてやる。顔を左右に振りながら、一寸舌を出して、鼻を舐めだす。松
ぼつくりのような尻尾を激しく左右に振っている。

「まだまだ、姥桜じゃないですね。可愛いし、元氣じゃないですか」「飼い主に似たのかも、冗談ですけど。それでは、
また……」と明るく答えて私の前を通り過ぎる。「あの女、結構オチャメ。楽しい人やないか!」と思いつながら、また、
ベンチに腰を下ろした。一寸した会話で、人の印象が変わることもある。言葉を交わすことは大切なことだ。

どうも今まで思っていたことは余りにネガティブ過ぎるようだ。子供はいないかもしれない。この時間帯に犬の
散歩をするのだから、子供がいれば連れてくるだろうし、子供もついて行きたがるだろう。きつと、いない。子供の代
わりがあのだ。子供が出来ない、それで、犬を飼うようになった。そうだ、それに違いない。どこで飼っているの
だろう。家の中、それとも、家の外だろうか。

雲

雲は優しい

暑い時には日陰をくれるし

お日様を助けてあげる

お日様だつて泣きたいんだよ

でもね お日様が泣いたらみんなビックリするでしょ

だから雲は言つたんだ

隠してあげるから泣いてもいいよつて：

雲がお日様を隠す時はね

お日様は泣いているんだよ

優しい雲が隠してくれているから

思いつき泣いて 雲がその涙を拭いてあげているの

令月

でもお日様がいっぱい泣いちやうと

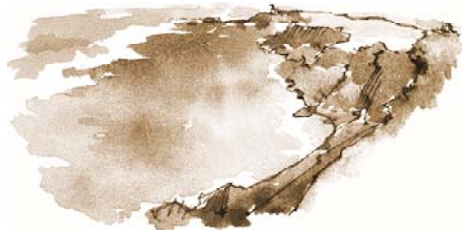
雲が涙を拭きとれなくて雨になつて落ちてくるの
だから雨を嫌いつて言わないであげて

たくさん泣いた後のお日様は

またにつこり笑つて お空を照らしてくれるから

雲は優しいね

雲があるからお日様はいつも笑っているんだよ

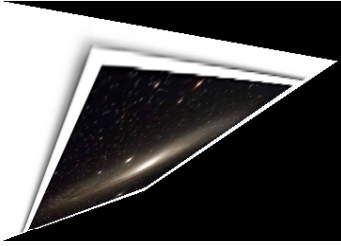


君といた夏

明花

人を待つ楽しさを知る改札口 早く着いてね ゆつくり来てね
人混みに君をみとめて右手挙ぐ ブルーのシャツの笑顔眩しく
カーステの君の選びし洋楽に 全身染まる夕焼けの中
ラメ入りのマニキュアをぬるときめいて たった一度の七夕の夜
芯紅き黄ハイビスカス咲き誇る 君といた夏 天までとどけ





十五夜三句

待宵や 欠けたる君の 可愛さよ

大西隆史

名月を 故人と望む 涙酒

居待月 試験管から のぞき見て

孤独

大西隆史

世界にたった一人

「ワタシ」

たった一人の「ワタシ」が六十億で、世界は出来ている

「ワタシ」が壊れれば、代わりなどない

「ワタシ」が世界にいるために、「ワタシ」は生き続ける

孤独つて、こういうことかもしれない

生まれた瞬間から「ワタシ」達は一人だ

死ぬときも一人

誰もがそれを分かっているが

くつきやしない孤独を寄せ集め、くつけて、孤独を押しやろうとする

大事な、大事な、ワタシだけの孤独を憎み、蔑み、忌む

孤独は嫌だと、叫びだす



ワタシだけの世界をなぜ差し出すのか
ワタシだけの世界をなぜ拒否するのか

誰もが生まれた瞬間から孤独を抱きしめ続ける
愛しい、愛しいわが子のように

「孤独」は望まれてきたのだと

「ワタシ」を失わないように、「ワタシ」が帰るために
望まれてここに居るのだと、叫びたい

「孤独」の融和と解離

愛しい我が子を、愛しい人へ

世界は無限に広がる

「ワタシ」の大事な「孤独」を介して



編集模様

「あららの」と、プリンターの調子が続いています。このix5000という機械は、一度修理に出しました。もう数年になります。

プリンタ自体は比較的安いのですが、インク代が高いです。キャノンもエプソンも、「機械は安く、消耗品のインクで儲ける」という商法だと聞きました。といって、プリンタは云万円で。まあ、年賀状印刷にしか使わない方に比べると、恐ろしいほど酷使しています。「よく動いてくれてありがとう」と思ったらまたまた快適に動き出しました。最後のご奉公とばかり頑

張つてくれています。63歳になった私も最後のご奉公で、短大で学生に教えています。流石に90分授業が2回続くと、声は枯れ果てダウン気味です。短大とは有期労働契約といつて一年間のお勤めの約束です。あと半年、プリンタと同じように気を取り直して頑張ります。

アクトスの例会は高阪さんや瓜生さんにご迷惑をおかけしています。アクトスの主宰も人生の最後のご奉公。そしてやりがい。こちらは少々長期戦でがんばりたいと思います。よい原稿のご協力をお願いいたします。

亥一郎

例会報告

いずれも場所は 兵庫県学校厚生会サンピア明石会議室 C

※申し訳ありませんが仕事の都合でも9、11月は例会に参加できず、高阪さんと瓜生さんにお世話になっています。作品のコメントはHPでご覧ください。◆HPの掲示板に、夏子さん、高阪さんが例会報告や作品などの感想、また他の方々も感想などを上げて下さっています。ネットがご覧になれる方は是非一度覗いて下さい。また掲示板に書き込みもどうぞ。

<http://www.jusmystage.com/home/actos2008/>



続
りーくんと月

今夜も空を見上げてりーくんは、

「お月さまあ」と叫んだ

「きれい！」とじっと夜空を見上げている

「りーくんね、いつかお月さまに乗りたいんだ」

* りおんにとってお月さまは身近な存在なんですよね。

ゆきんこ



たからもの

ゆきんこ

りおんを初めて抱いた日、

こわれそうだった。あまりにも小さくて

主人とかわるがわる抱っこしながら、

「こわいね、小さくて」とつぶやいた

あなたが生まれてきてくれて

ホントによかった この私たちのもとへ

あなたがいるから笑顔になれる

あなたがいるからみんながしあわせに包まれる

あなたがいるから

あなたがいるから



俳句

春うららら……君の温もり

君からの便りの温もり 春立つ日

優しくなる雨が大地を包むから

夏子

夏子の恋シリーズ第IV

7号 冬銀河……君を恋うのつづき

春うらら 茶房の隅でジャズを聞く

片栗の花 君に告げたいことひとつ

肩に散る花びらまだ言い出せなくて

蔦若葉 心の空白埋めていく

つづく

蟬時雨

彩さい

華はな

今日もどこかで生まれて死んで
蟬時雨

蟬の穴 昨日の秘密詰めておく

数ⅡB解けた十時の蟬時雨

万感の思いを籠めて
蟬時雨



命の灯燃え尽きるまで 蝉時雨

今生の別れのように 蝉時雨

路地裏に風の有り無し骸蝉

(日記)

柴小路 秀磨

「今日もほんまに暑おすなあ」、七月十七日の祇園祭山鉾巡行に合わせたように梅雨明けした京都では、これが毎日の挨拶である。おまけに今年は雨もほとんど降らず、ことの外湿度が高いものだから、日中はとても外に出られたものではない。にもかかわらず、外国からの若い観光客などは、決まって重いリュックを背にし、まばゆいばかりに伸びやかな肢体を陽にさらし、地図を片手にサウナのような京都の町をせつせと歩いているのには、ほとほと感心させられる。

私はと言うと、夏の間はガイドの要請も少なく、暇をもて余してはいるが、こう暑くてはさすがに鴨川をランニングするという暴挙に出る勇気もなく、さりとて視力と読解力の著しく低下した身では読書三昧というわけにも行かず、エアコンの中でテレビを見ながらひたすら日の暮れるのを待ち続けるといった日々が続いている。それでも時には午前中、意を決して、熱砂と化した鴨の川原を気休め程度走つては、ぼてつた体を木影のベンチに横たえて、馴染みのホームレスの動向に目をやりながら目的の無い時間を浪したりしている。

こんな日が続く中、私はふと良い暇つぶしを発見した。感受性の乏しくなった自分でも結構興味を注げる読物を見つけたのである。それは押し入れのダンボール箱の中で四十年あまり眠り続ける私の古い日記帳である。私は若い時分何かの影響を受けたのだろう。二十才の頃から今日まで日記らしきものを付けている。こ二十年くらいのは手もとに置いてあるが、それ以前のものは捨てるに忍びずダンボールに積めて押入れの奥深くしま

込んでいた。退職して暇もふえて、何かにつけ若い頃をふり返る事が多くなった今、家を整理していてふと見つけた日記帳を手にし、私は思わず引き込まれてしまった。それは私にとっては実に興味深い読み物であった。

ほとんどは日々の取るに足らない出来事や他人からすれば実に馬鹿げた私の行動と雑感を大仰に記しただけのものであるが、そこに展開するのは、今に至る友との交流、その時々を生じた仲間との交わり、意味深な女性のイニシャルと恋への期待、やがて訪れる失恋の痛み、孤独と寂寥を抱えて登った山々、そんな繰り返しの中、足繁く通った街や店の名、その時見た映画のタイトル等々……。今と変わらぬ進歩のない自分に出会う度に苦笑することもしばしばであるが、それは確かに私の成長記録であると同時に、正に昭和の風俗史でもあった。

もともとこの日記は他人に見せるためのものではなく自分の思いを確かめるために記したもので、中には家人はもとより、他人には絶対に読まれたくない部分も多々あり、今のうちに人目に触れる前に処分しておかねばと思ひ、ならばこの機会にもう一度だけ読み直して、しっかりと私の内に封印した後、思い切つて廃棄しようと決めて今、熟読しているわけである。

読み進めていく中、布張りに装丁された表紙に金文字で「風雪」と刻まれた一冊の日記帳が目にとまった。中を見ると一九七〇年と記してある。一九七〇年と言えば、大学を卒業し就職、退職を経て、新たに教師としてのスタートを切るに至った、私にとっては人生を決定づけた大切な年であつたと言える。卒業を前に、半月余り九州を独りで放浪し、四月に就職するも、七月には退職し、教員採用に向け、アルバイトと図書館通いの日々、あてのない就職活動と挫折、不安と焦燥の中で繰り返し返される自問自答、自責の念はやがて夢の実現へ向けての大きな原動力となつて行つた。今読み返しても本当に精神面で充実した一年であつたことがわかる。

そんな一年の中で、ちよつと毛色の変つた異質な日記に目が止まつた。それは十一月二十五日の日記で、この日起こつたある事件についての感想を述べたものである。「一九七〇年十一月二十五日」この日、世間を騒がせた事件とは何だつたのか、皆さんおわかりですか？ここにその日の日記の全文をそのまま紹介しましょう。

「十一月二十五日（水）、今日は本当にシヨックだつた。三島由紀夫の死が僕の心を暗くした。狂つた中年男の自決は怠惰な生活に満足しきつてゐるかの如く過ぐす我々日本人の精神の奥に眠る大和魂なるものを一時的にはせよ、蘇生させるほどの刺激を我々に与えたと言えるかも知れないが、ただその行為が作家三島由紀夫によつて成されたという事実がいやがうえにも僕の心を暗くした。勿論氏の右翼的な言動については今までに新聞その他で伝えられてはいたが、そこで報ぜられた三島由紀夫という人物は、右も左もない無思想の僕にとつては無縁の人、別世界の人でしかなかつた。しかるに今、僕はここで氏のとつた行動について論ずる資格は毛頭無い。僕の知る三島由紀夫は、あの天才的とまで言える才能をひつ下げて戦後の文壇に華々しく登場した、あの作家三島由紀夫である。あの心憎いまでに漢語を駆使して古典的とも言える華麗なる氏の文体は、僕ならずとも氏の作品を手にする者すべてを魅了せずにはおかぬものと思う。犯罪者の倒錯した異常心理を分析し、そこに完全なる虚構世界を見事に創造し得た傑作『金閣寺』、又、あるいは若者のみずみずしい恋愛を素朴にうたいあげ、叙情あふれる『潮騒』等の小説は、僕をしてその華麗な文体の織り成す作品世界に陶醉させずにはおかぬものであつた。しかし、今やそれらの作品を生み出した偉大なる才能は自らの刃によつて断たれてしまつたという事実、それのみが三島文学を愛する僕にとつて惜しまれてならない、本当に残念でならない。」

今、読み返すと、実に恥ずかしい文章であるが、当時の自分の熱い思いは容易に想像できる。この夏、私は四十

年ぶりに三島由紀夫の代表作とも言える『仮面の告白』、『金閣寺』を本棚から取り出して改めて読み返してみ
たが、今の私にとつてそれは再読という作業で済まぬ大変な作業となつてしまった。とにかく自分の頭には蓄積さ
れていない未知なる語彙に彩られた難解な文章表現について行けず、正に「三步進んで三步下がる」といった状態
の連続で、読み終えるのに一夏を費やしてしまった。そして大した感動も得られなかった。この四十年という隔た
りの中で、自分の肉体の衰え以上に、その精神の変貌に私はただ愕然とした。今の自分から想像も出来ないこと
だが、あの時、あの作品に感動し、三島由紀夫という作家に傾倒していた自分が確かに存在したのだ………。
今これらの日記帳を読みながら私はつくづく日記は心のアルバムであるという思いを強くした。この古い日記
帳の中の幾冊かは恐らく処分されることなく、今後もこのダンボールの中で眠り続けることになるだろう。



競演 第五回

あき

あき、は『秋』とは限りません。このコーナーは工夫次第でいろいろな発想豊かな作品の舞台にもなります。

想うはあなた一人

令月

誰の涙が枯れ果てて 涙の代わりに血を流し

彼岸花を染めたのだろう

遙か向こうまで続く赤い紅い彼岸花

それはまるで

あの世とこの世を分ける三途の川みたいだった

死人花

地獄花

幽霊花

剃刀花

狐花

捨子花

不吉な名前は数あれど

異国では 相思華 と呼ばれているのを知っている

決して一緒に存在しない花と葉

葉は花を思い 花は葉を思う

永遠の片想い



想いを伝えられず

共に在ることの許されない彼岸花

けれどその想いは

花が枯れても 葉が萎れても色褪せず

永遠にあり続ける

故に異国の人と呼ぶ

相思華と

もしも貴方が花で

私が葉だとしたら

私は想うだけでなく

共に咲いて在りたいと

咲き誇る彼岸花に目を細めた

秋晴れ

大西 亥一郎

踏切手前を右折したところで、原付バイクが蛇行しだした。

「あれっ」と最初は路面の、段差に引つかかったかと思つた。

九月八日、午後七時。

初秋だが今年は異常に暑い日が続いている。猛暑は流石に息切れしだしたとは言え、バイクなしで朝晩片道二十分以上歩くのは辛い。それが頭の片隅をかすめた。

バイクは後から左右に引きずられるようにハンドル操作が重くなった。

「あらら、パンクだ」

原付バイク歴は三十年ほどだ。感覚でそれと判る。

最初はホンダのリターン式のスーパーカブである。足でチェンジを操作する。スクーター式の原付バイクが登場してからは、面倒なチェンジ切りかえを避けて専らスクータータイプだ。パンクは何度か経験している。尤も最近

のものはあまりパンクしないのだが、運が悪かったのであろう。

暗くなり出した線路沿いの路肩にバイクをとめて、後輪に触れてみた。なるほどタイヤが外れて、チューブが見える。

七時前に大学を出たときは異常はなかったのだ。たぶん、少しずつ空気が漏れだして、踏切手前辺りで、身体に感じるほどになったのだろう。或いは急速に穴が大きくなったのかも知れない。

「やれやれ」とため息とともに呟く。押して歩く必要がある。

エンジンをかけて、スロットルを調整しつつ前に進む。播但線香呂駅西側の道路はあまり人が通らないところだが、それでも時折現れる人影が、興味深そうにちらりとこちらを眺めている気がする。

路肩に置いたままにして、帰宅してから業者に連絡して、と言う手もある。が、四月から借りているアパートまでは押し歩きでも十五分ほどで着くだろう。それに国道に出ると利用しているガソリンスタンドがある。

「まあ、朝、怒りすぎた罰だな……」と考えつつ、バイクを進める。

今春からの勤務先は、経営の困難度を増す地方短大である。私は、家業手伝いや民間企業四年余、校長歴を含む中学校勤務十八年、県教委指導主事など九年、市教委課長など三年という「お勤め人生」の後、この私学に非常勤講師で四年通った。若い頃からの児童文学創作歴をかわれて、幼児教育科で幼稚園教諭や保育士を目指す学生に教えることになった。といつてもその四年間は、毎年半年間、週一、二回だけの授業だから、学内のことなど皆目わからない。教員、事務員、そして学生の名前さえ殆ど知らない。授業前に来て終われば帰る。まあアルバイトである。だが、一年間という期限付きの准教授になった。すると、たちまち実にユニークな人間が居残って

いて、システムが軋んで、もの凄く深刻な状況が進みつつあるのが判ってきた。少子化が進んで地方の私立大学は似たような所が多いと聞いている。「考えられない世界だなあ」と六十三年間の人生経験から思う。当然、軋轢が生じて、爆発もすることになる。

それは例えてみると、沈みかけた小型船だ。港に辿り着けば修理も、新造も可能だが、優秀な乗り手の多くはもうずっと以前に大型の新鋭船に移っている。残った人材もボートで逃げ出しつつある。逃げ出さないのは泳がないしボートに乗れないし、他の世界に受け入れられない人か、いよいよ沈みかければヘリコプターで脱出可能な人である。その船に新しくやってきたのは私のような知識と経験はあるが船長室がどこかも判らない新米船員か、沈みかけた船でも「浮いているだけ利用価値がある」と考える人である。

※

「『あまり怒つてはいけませんよ』という仏様のメッセージだな』と思いつつ、暮れかけた道をガソリンスタンドに辿り着いた。

ご主人は七十歳くらいだろうか。ニコリともしないで話を聞いて、バイクを点検し、それから電話帳を開き、電話をかけ始めた。だが、七時を過ぎているからなのかどこも通じない。私は気が気ではない。ご主人はため息を漏らした後、私を見てニコリとした。「短大の先生でしたな。バイク預かっておいて明日の夕方までに修理しておきましょ」と言葉が出た。嬉しくなった。これまで二回給油しただけだが、立ち話をしていて、それを覚えていてくださったのだ。

バンクバイクから解放されてアパートに辿り着く。着替え、掃除、風呂、洗濯、食事、浴室乾燥機の準備、これで

大体帰宅後の生活は終わる。三十年ぶりの単身生活、約半世紀ぶりのアパート暮らしである。

「昔、テレビがなくて、家庭教師先の奥様から『先生、これ使つてね』と白黒テレビを貸してもらつたな」と、狭い六畳に敷いた布団の中で思い出した。「たしか、段ボール箱の上に置いたつけ。そういえば、洗濯機もなくて手で絞つたシャツが、つるされた流しの上から、ポトンポトンと大きな音を立てていたなあ……」そんなことを考えつつ眠りにつく。

※

七時半前、アパートを出ると爽やかな秋晴れだ。猛暑も少し弱りだしたようだ。

「助かつた」とホツと息を吐く。アパートから二十数分はかかるだろう大学までの道を歩くのは初めてだ。ジーパンにTシャツ、リュックというスタイルは六十三歳の私には似合わないにしても、実に動きやすい。人生の過半は背広にネクタイの生活であつたから、それが許される大学教員や夏休みというのは助かる。もつとも後者は『二ヶ月もある大学の夏休み』というイメージとは相当違つて忙しかつた。

十分歩く、驚いたことに今朝は噴き出す汗がない。「仏様ありがとうございます」と手前勝手に感謝する。香呂駅を西に進んで、矢田部川を渡り、右折する。香呂小と、広がる農地を左手に、川沿いを北進する。この道は、朝の一時にだけ間に合うように開放される香呂駅からの通学路である。

少し薄雲もあるが、空気は澄んでいて肌心地よい。この姫路市香寺町周辺は山に挟まれた農村地帯だ。腕のプロトレックという時計で調べると高度も八十メートルほどある。もともと綺麗な処だが、熱気から解放されて山も緑も、川の音さえ涼やかだ。

「はて？」右手は小さな矢田部川で、向こう岸は刈り取りの終わつた田んぼと住宅である。左手は田んぼだと思つていたのだが、数十センチの背丈の緑の海だ。「なんやろ、秋野菜でもないし」と、辺りを見ると殆どこの手のひらほどの葉を持つ植物がびつしりと植えられている。頭を捻りながら進むと、その畑から農作業着姿の男性が、ボンベを下げて現れた。道ばたに軽トラックがあり、どうやら薬剤か何かの補給らしい。

「おはようございます」出た声まで軽やかだ。昨日の午前中に怒り心頭に発した心根は雲散霧消している。頭を下げて続けた。「これはなんですか。もの凄い量ですね」年の頃なら六十半ばの男性は、「ああこれなあ、豆や」とのほほんとした顔だ。「豆ですか、私も退職してから三十坪ほどの畑借りてますが、今年初めて「三度豆」作りましたが、ほんの一、二畳の面積なのに無茶苦茶採れました」「ああそれなあ、初めてやし土がよかつたんやろ、連作嫌うからなあ」「なるほど、それでか。でもこの豆は何ですか、畑回りには少し背の高いものもあるけれど」「これはなあ、人様が食べるんやない。醤油の原料の大豆や。龍野に持つていく」そう言われて驚いた。龍野市は香寺町の更に西にあつてだいたい離れている。醤油で有名な市だが、その原料の豆が通学路周辺で作られているとは知らなかった。「それでなあ」男性は続ける。「畑の周り、背の高いのは黑豆や」またまた私は目を丸くした。黑豆を回りに堀のように植えるには理由があるのだろう。男性はボンベを下に置いて作業を始めた。私は礼を言い頭を下げた。今朝は一回生の最終班が付属幼稚園実習の開始日である。登園してくる前から見ておきたい。歩き出すと、なるほど大学手前まで、この豆畑が広がる。男性の説明だと七月に植えて十二月に収穫だと言う。非常勤講師の時代は駅から徒歩で通っていたが、七月には授業を終えていたので、お目にかからなかつたわけである。「はて、昨年は後期にも急に一講座入ったが」と思い至つて苦笑する。目に入つていなかっただけのことなのだ。人はものを見

ているようであり、知識や経験、興味関心、思い込みというめがねを幾重にも掛けているのだ。「佛は半眼」である。その目は余分な物理的情報を遮断するだけではない、目は心の窓と言うが精神も透明で予断がないという意味なのだ。総てを見る、その背後にあるものを見る、そのものの時空の流れを見る。本質的存在を見る。「まあ、とてもとても、とてもそうはいかないが」私は、ほーつと長い息を吐いて校門から秋空に広がる学園を眺めた。

※

帰途、春秋庵という和菓子屋さんに寄る。小さな店だが美味しくて有名どころだ。半年ですっかり懇意になつて、講演会の案内なども置かせていただいている。手土産を買つてガソリンスタンドに向かう。バイクは元通りだ。タイヤそのものが外れたのだという。パンクと思うわけだ。料金を払い、何度もお礼を言つて店を出た。夏と秋がせめぎ合う夜空が姿を現し始めていた。



秋のさまよい？

高阪博一

秋ってどんなイメージなのだろう。パソコンの前に坐り眼をつぶった。直ぐに紅葉が浮かんできた。これでは定番すぎる。もう一度、眼をつぶった。何となく暗い感じの時間があつて、浮かんできたのは松茸だった。そう云えば、最近、松茸の実物にお目にかかったことがない。子供の頃には、秋に一度くらい食べることが出来たと思う。それなのに、今は 頭の中だけにしか出てこない。淋しい限りだ。

こんなことを思っていると課題分が書けそうもない。今度は秋・秋と念じながら、眼を閉じた。ぼんやりとした中に何か文字が浮かんできた。何かと思いつきながら、「はつきり見えろ」とぶつぶつ言っていると、『盲目の秋』と読めた。「何や、中也さんやないか」と呟いた。

高校時分にこの詩人のことを知った。担任の先生の恋人は長谷川泰子という名前だとの噂がクラスに広まった。どんな人だろうと思っていると、何かの折に、先生が中原中也という詩人が好きで、その恋人の名前なのだと誰かに教えられた。それに、その女性は中也をおいて、別の男のところに行ってしまったことも。恋人に逃げられたという詩人はどんな詩を書くのだろうと興味を持ち、彼の詩を読むようになった。それは、『汚れつちまつた悲しみに』であり、『一つのメルヘン』であり、浮かんできた『盲目の秋』であつた。彼の詩には独特のリズムと効果的な擬音の使い方、そして何とも云えない哀しみがあるような気がした。

『山羊の歌』という詩集に収められているこの『盲目の秋』は、結構長い詩である。この題そのものに惹かれたこと

もあるのだが、自責と後悔と執着に充ちた痛切な思いが綴られており、高校生の私には明確に分からないままに、『盲目の秋』が私の秋のイメージとして、頭にイン・プットされてしまったのだと思う。

秋は人恋しくもの哀しい。実りの秋とはいえ、その後の冬枯れが明確に分かっている。何かしら別れの哀しみがついてまわる。この歳になったから、こんなことを書いているのだが、当時の私にはつきりと意識出来たわけではない。ただ、この詩にあるフレーズの幾つかに意味も分からず惹かれたのだ。『私の青春はもはや堅い血管となり、その中を曼珠沙華（ヒガンバナ）と夕陽とがゆきすぎる』や『去りゆく女が最後にくれる笑（エマ）ひのように』、そして『私がおまへを愛することがごく自然だったので、おまへも私を愛してゐたのだが：』等々だった。

中也の感想文を書こうとしている訳ではない。秋を書くのだと思い直してみたが、去って行つた女性の相手は誰だど、ふと思つた。その相手は小林秀雄である。彼の写真を見ると、鋭利で意思が強く、何より端正な顔立ちである。「中也さん負けてるよなあ。秀雄さんの方が男前」と思いつつ、小林秀雄にこの原稿で使えそうな『秋』がないかと考えてみた。

日本に於ける批評を確立した人であることは文学史上の事実なのだろうが、この人の文章は難解の一語である。何編か読んだが、分からないこと甚だしい。それでも、何かないかと考えていると、突然「そや、道頓堀！」と大きな声を上げた。これは『モーツァルト』にあるフレーズで、『大阪の道頓堀をうろついてゐた時、突然、このト短調シンフォイの有名なテーマが頭の中で鳴つたのだ』との箇所だ。

昔も今も変わらない大阪の繁華街、あの雑踏の中で、あの交響曲が鳴るのは、秋以外の何ものでもないと思つた。暮色に充ちた喧騒の中で己の孤独を痛感する。これは秋そのものではないか。だが、先のフレーズの前文には

『僕の亂脈な放浪時代の或る冬の夜、』とあり、秋ではない、冬なのである。一介の老人が小林秀雄を相手に「それはあなたの思い違いで、あの箇所は『或る秋の夜』と書くべきでしょう」と言い張ったところで、横綱と小学生が相撲をとるようなものだ。しても仕方のない勝負は回避するのが老人の知恵だ。そこで、あのト短調の交響曲はどうかと考えてみた。あの曲には季節を規定するものは何もない。聴く者の思いよう次第だ。それなら秋だ、きつと秋のイメージで作曲されたものだと思った。

あの曲はモーツアルトの交響曲40番で、『有名なテエマ』は第一楽章の最初に弦楽器で演奏される。速いテンポで上昇し、同じように、速いテンポで下降する。凝ったメロディーではないので、すーと気持ちの中に入ってくる。短調は哀しみを呼び起こす。それも、上昇し即下降すると一層その思いが強くなる。テンポが遅いと重苦しいが、速いところか乾いた感じで、さつと過ぎていく。モーツアルトの『疾走する悲しみ』と云われる所以なのだろう。

柔らかな陽の入る部屋から、色づいた木々を一人で眺めている。紅く鮮やかに染まった葉が風に揺れている。窓を開けると、さつと風が部屋を通り抜けていく。ふと、謂れもないような気持ちに陥ってしまう。涙が出るわけではない。泣き声をあげるわけでもない。それは青い空に吸い込まれていくような哀しみなのだ。こんな感じがあの交響曲の始めの部分にはあると思う。これは私がいだく秋のイメージの一つなのだ。

音楽の感想を書くのは難しい。音は再現され、消えながら連続していく。絵画のように『もの』としてあり、『もの』として残っているわけではない。楽譜はあつても、それを見ただけで感動する者は先ずいまい。演奏者によつて再現されて、初めて音楽作品と呼ばれよう。音楽は作曲者と演奏者の二重構造となつているところに、感想をややししくしている原因の一つがあると思う。

それに、あの音楽理論、中学頃までは学校でそれなりに習うが、日常使うわけではない。この歳になると、そんなものはきれいさっぱり忘れてしまっている。おまけに、楽譜が読めない。こんな者が音楽について書くと、主観的な印象表現に陥ってしまう。音楽についてはこれくらいにしておこうと思う。そうしないと、『秋のさまよい』の後が続かない。

モーツアルト（1756～1791没）と同世紀の日本人で、作家と云えばいろいろな人物がいようが、近松門左衛門（1724没）がはいるかと思う。五十年以上、近松が先行しているが、この点は寛容の精神でお許し願いたい。

近松と云えば心中物、心中物と云えば近松で、その道の権威だ。特に、心中の道行き、それは秋のイメージそのものではないだろうか。『曾根崎心中』の道行きの文章、『此の世の名残。夜も名残。死に行く身を譬ふれば。あだしが原の道の霜：』、名文以外のなものでもない。私の最も好きな文章の一つだ。

浄瑠璃の語りなので、七五調のリズム良い文章で仕上げられ、哀調に充ちていて心に迫ってくる。文楽の舞台では、この部分は複数の太夫と三味線で演奏するので、文章ほどの印象は残っていない。その後にく、心中の場面が凄惨であるにも拘らず、綺麗に死なしているという印象が残っている。人間がするのではなく、人形がしているためなのだろうか。

この心中の季節はなんと云つても秋でなくてはいけない。春では幸福に満ちて死ぬ気にならない。夏では暑すぎて死ぬまでに疲れてしまう。冬では枯れ枯れて『あはれ』過ぎる。秋の清冽な空気の中で、暗闇に冴えて光る星に願いをかけながら、来世を誓う。この雰囲気はどう考えても秋、それ以外に考えられないものだ。

それで文庫本をバラバラ捲つていて驚いた。欄外に挿入されている注記に、細かな文字で『時：四月六日』と印刷されている。これでは、あの『道頓堀』と一緒にやないか。それにしても、今の今まで、秋と思つていたのが、注意不足、認識不足、能力不足である。「馬鹿やなあ」と溜息をつきながらも、諦めないのが年の功なのだ。これまで、どれだけこんな場面に出会ったことか、がむしやらに前に進むしかない。「秋はないか？ 秋はないか？」と文庫本をもう一度入念に読んでみた。それがあつたのだ。

最後の場面、『断末魔の四苦八苦』の前文に『南無阿弥陀仏』と繰り返す文章が出てくる。「これだ」と思った。阿弥陀仏は西方浄土、陽が西に傾き、黄昏が迫る頃、空を照らす瑠璃色、それこそは秋に最も美しさを發揮する。この時間帯は秋のイメージと云つても云い過ぎではなからう。

我田引水・牽強付会と云われようと、厚顔無恥に突き進むのが年寄りパワーだ。それで、この時間帯を「秋はこれですよ」と云っているような何か作品を見つけなければならない。そうじゃないと、さまよえない。きつとあるに違いない。「なんやろう。あるはずやけど……」と思つてみると、また閃いた。それにしても、何と云う、この都合のよさ！

それは『枕草子』だ。平安時代の随筆の最高峰だろう。教科書にも出てくるあの有名な出だし、『春はあけぼの』である。この部分はよく覚えているのだが、夏は？ 秋は？ 冬は？ となると、正解率は低下するのではと思う。

因みに『夏はよる』、『冬はつとめて』である。秋は何かと云えば、『秋は夕暮』なのだ。
「やつぱり、そうでしょ」という感じである。

この夕暮の何が具体的の良いのかを文中で見ると、『からす』、『雁』、『風の音』、『むしのね』などの風情である。瑠璃光が茜色に変わり、西の空を染めている。その逆光の中を、からす・雁がねぐらに帰ろうと、群れ飛んでい

ひとこと、ふたこと、みことに よこと

大西亥一郎

◆殺し屋の住人：大西裕子

「ふーむ」と唸りました。ゴキブリ退治が作品になるとは思いもよらなかったからです。誰もが経験して、多分心の中に強烈なインパクトを生じているでしょう。叩きつぶしつつ、「こいつは害虫なのだ」と自らに言い聞かせつつ手を振り下ろす。一瞬の快感とゴキブリへの嫌悪感と、心の襞に潜んだ暗い残虐。でもそこまでは考えもしませんねえ。この作品、最初の部分でネタバレなのです。が、面白く読めました。

◆孫を見送る父親の寂しさ：小川悦子

私も街で老人を見かけると、時折、父や母を思い出します。生きていればあのくらいかと考えます。神戸新聞に採用されたの

は、総ての人の心に同じ思いが蘇るからでしょう。『同生相勸尽須来』というのはお経の中の一文です。「極楽浄土へと往生された方々も、皆共に勧めあつてお出で下さり、私たちをお護り下さい」という意味なのですが、心の中に生きている父母をいつも思い出します。暖かい作品ですねえ。

◆箏の先生と尖尾鳳

2010・7：伊藤雪山

私たちが知っているようで余り経験しない世界をいつも読ませていただきます。この伊藤先生、私の先輩なのですが、登山・尺八はプロ級、時折拝見する毛筆も感心しています。琴の世界・箏と書くこともある、尺八の世界というのは独特のしきたりがあるのでしょうか。いま文章を勉強されていて、私はたじです。ただ、私は少しばかり先に

書き始めていますので、いつも言いたいことを書かせてもらっています。で、遠慮なく。

「文章を長く続けなくて、主語述語で一文、と短くしてみてもどうでしょうか」

「尖尾鳳と箏や尺八の世界を書き分け別の作品にしてはどうでしょうか」

もつと興味津々の世界を読ませていただきます。と考えています。

因みに「尖尾鳳」は、私もネットで調べてみましたが、9ページに挿入した写真しか見つかりませんでした。果たしてこれがそうなのかも不明です。間違っておりましてらご寛恕下さい。

◆タイムマシーン：永井組若芽

同窓会のお世話をしたと聞きました。なるほど同窓会はタイムマシーンですね。懐かしく、甘酸っぱい、ほろ苦いといった感情がな

いまぜになつて、今の理性が気圧されるのかも知れませんが。この作品、もう少し書き込んでみたかどうかと思いました。チヨコレートの部分ももつと心の動きを書き込むとおもしろいと思います。往復書簡のような形でいいし…。多分新しい世界が広がり、『煙』にむせるかも知れませんが、今の自分にはね返つても来るでしょう。

◆カラの空のその先に… 大西裕子

「何かあると幸せになれる何かなんてない」と心が告げているという「詩」でしょうか。空も風も太陽も、一人の人間の心などしらぬげて、それでいて人の心を満たしているのではないかと思います。悶々とした心象風景が描かれている様でいて『空つば』という語彙の多用が、その本質を捉え切れていない気がしました。勿論私は『詩』を知らない

いわけで、見当違いならご容赦ください。◆夕暮れのベンチで… 高阪博一

いつも逢意の文章には頭が下がります。散歩で出会う人々にあれこれ想像をたくましくする様は読んで楽しく、ニヤリとしてしまひそうです。『ほのかな異性への関心』がこの文脈からは滲み出ています。だからこそ読み手の心に入り込むでしょう。十津川物語を書いた川村たかしさんは、文章を書く要諦として「説くな語れ」といつています。『よく語る』ことで、『よく説く』ことができる『のです。この高阪さんの文はそれ良い例だと思ひます。もう一点、『総ての作品は推理小説』という原則です。知らないこと、どうなるのかな、なんだろう、という好奇心が読み手をひっぱっていきますから、この点でも、高阪さんの作品は素敵です。

勿論ここに描かれていることからもう一步踏み込めばドラマが生まれます。

◆雲… 今月

なるほど雨はお日様の涙なのですか。お日様も悲しい時があるんですねえ。心優しい童話の世界を彷彿とさせられる詩です。無論、お日様ついても「三三三」している君なのかも知れません。そして雲も又、泣きたいのをこらえてお日様を隠している君なのかも知れませんか。

◆君といた夏… 明花

韻を踏んだ『君といた夏』です。『ラメ入りのミキヲをぬるときめいて たった一度の七夕の夜』なんて、なんとなく男性でも想像できる心象風景です。最初の「早く着いてね ゆつり来てね」も、矛盾する心根が彷彿としてきます。三十一文字（みそひと

もじ」と言う枠の中に、どれほどの思いと風景を溶け込ませ、それを伝えていくことが出来るか……。短詞型と言われます。書き加えて長く表現できる散文とことなり、ここには凝縮された言葉の世界が広がります。

◆十五夜三句・孤独…大西隆史

メールをもらいまして、「月見をしたか」とありました。考えてみると、妻と見上げたことはありますが、じつくりと、しみじみとしんみりとお月様を見たことがありません。月見団子や月見酒とも無縁でした。無残ななあ…と詩を読みつつ自らを思いました。『孤独』の詩は「ワタシ」が掴めないものかしさを訴えているようでした。お釈迦様は「天上天下唯我独尊」この全宇宙において、人間一人一人はみな自分自身が最

もかけがえの無い尊いもの―大乗的捉え方―と言われました。それを誰も理解できないという孤独を克服されて、苦難の生涯、歓喜の生涯を送られたのだと考えています。世界は「ワタシ」の大事な『孤独』を介して広がるのでしょうか。

◆続リーくんと月・たからもの…ゆきんこ

ゆきんこさんの喜びの声が、二つの作品からあふれ出ています。女性と男性では「まご」に対する感覚もたいぶ異なるようです。私など可愛いことは可愛いのですが『もうい命』と覚めた目で見ている部分があります。私だけでも知れませんが…（んむ…）。それでも命を継ぐ者です。世界をつなぐ者でもあり、夢を紡ぐ者でもあります。この傾向の作品をどんどん編まれてはどうでしょうか。お孫さんへの未来の贈り物になるは

ずです。

◆俳句（春うららー君の温もり）…夏子

これはシリーズです。短詞型ですから言葉を削りに削る作業は、私など想像もつきません。『片栗の花 君に告げたいことひとつ』なんていいですねえ。春を告げる花、「春の儂いもの」「春の短い命」に託された思いとはなんでしょうか。一度『夏子の恋シリーズ』全体を俯瞰してみたいものです。

◆俳句（蟬時雨）…彩華

『数ⅡB解けた十時の蟬時雨』で、苦手だった数学を思い出しました。私の通っていた垂水の星陵高校は、当時開発中の高台の林の上にありました。暑さも忘れて数学の問題を必死に説く姿と、それが解けた瞬間に飛び込んでくる蟬時雨が鮮やかな対比となって飛び込んできます。もつとも当時

の私は、問題が解けず焦るばかり、蟬時雨の響きなどいつまでたつても聞こえなかつた気がします。

◆日記：柴小路秀磨

そうでした。三島由紀夫が市ヶ谷の自衛隊で盾の会の指導者として割腹自殺したのです。アクトスには、私、高阪さん、柴小路さんと同年代が三人います。みんなそれぞれに大変な影響を受けた事件でした。ですから当時を思い出しつつ、「そうだった」とある意味懐かしく拝見しました。そういう書き方は見事なものです。この作品は、背景がもう少し判れば、若い方々にも読みやすくなると思います。

◆想うはあなた一人：令月

彼岸花が「相思華」とは知りませんでした。花言葉や、花の別名も上げられていて、

うまくそれを使つて詩にまとめられていきます。ただ、知識が消化されておらず、昇華出来ていない気がします。もう少し寝かせて、行間を読むような作品になるといいなあと思いました。

◆秋のさまよい?…高阪博一

紅葉や松茸はともかく、秋から「中原中也」の『盲目の秋』が出てきたところで私は降参です。中原中也の名前は知っていますし、多分詩の一つくらいは見たこと(読んだことではない)はあるにしても、その心には、掠つたこともないだろうと思います。さらにそこから小林秀雄が出てくると、『参つたなあ』となります。恐らくこちらも名前は知つていて、多分、なにかその作品に触れたことはあると思うのですが…。で、話はモーツァルトに飛躍して、そこから同世紀に生きた

近松門左衛門が出てくる。」「……まあ、ええか」で、『死』と『秋』につながつて『南無阿弥陀佛』がでてきて、「枕草子」である。まあ最後は『カラスの勝手ですよ』で収まっているのであるが。しかしまあその読書量、博識には脱帽です。しかも面白く読めました。

◆例会に参加できないので今回だけ、勝手な感想を上げさせていただきます。お怒りになられませんように。(亥一郎)

◆ 例会は第2土曜日です。15時から サンピア明石

以後も第2土曜日、15時からの予定です。出欠のご連絡は不要です。

※参加希望の方は奥付編集室までご連絡下さい。詳細をご案内します。

※アクトスのHPは、<http://www.jusmystage.com/home/actos2008/>

※アクトスは「行動する人」の意。

◆パソコン用HPに掲示板を作成しました。ご利用ください。

パソコンを使用できない方は、おたよりをいただいても結構です。2000字から4000字程度であれば、短時間で打ち込み可能です。判りやすい文字でお送りください。文章は表記を統一してください。原則そのままで使用します。例えば「20」か「二十」か「二〇」と言ったことです。明らかな漢字の間違いなどは訂正します。しかし書き手が故意に使っている場合もあります。造語もあります。また難読の漢字にふりがなが無く、読める漢字にふりがながあるような場合も書き手の考えに従います。

パソコンの場合、ワードや一太郎というワープロソフトでも、保存の形式はいろいろあります。ワードファイル、一太郎ファイル、ワードで作ったテキストファイル等々です。またタブやリターンも知らないうちに入るような設定ですと、『アクトス』に落とし込むと、縦書きが崩れてしまいます。記号なども注意が必要ですが、いまのところ編集子の方で訂正できる範囲内です。少しずつ、縦書きにするとどうなるか検討いただければ幸いです。



編集室から

一年も終わりの四半期。

日はほとんど短くなります。

読書週間も始まりますから、執筆には適した季節なのでしょう。

一つ踏ん張って力作をお願いします。もう少し原稿が増えても、このポイントでならば一冊に収まります。9ポです。今お読みいただいているように読むにはこれが最小のものだと思います。つまり老眼には少し辛いのですが…。

次号(第9号)は

原稿締め切りは12月末。

◆競演第6回 今回は、そうです「かん」とテーマを決めました。

◆入会するには◆

①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み

②〒・住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業

を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可

〒673-0031 明石市宮の上1の17の614

大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

同人募集

アクトス 一文藝集団

新しい文芸グループ「アクトス」をたちあげました。携帯・パソコンからのインターネット参加を歓迎します。楽しく『和』を大切にします。

活動内容

- 1 特定のジャンルではなく文筆全般にわたります。
 - ①創作 ②合評(例会) ③同人誌(アクトス)の年4回発行
- 2 参加資格はありません。「書きたいという気持ち」だけで結構です。
- 3 義務は ①会費、月額1000円 入会金なし[学生は月額500円]
(会費には同人誌代・郵送費等の事務費含む)
※1年前前納。(前期・後期の2回分納可)
(途中入会は半年単位で考えます。納められた会費は返金しません。)
▶活動の具体は、以下の通りです。
 - ①作品の提出(3月、6月、9月、12月末)ー5、8、11、2月の4回、同人誌(アクトス)発行。 無料で2部受け取る。
(余分に必要時、作品提出時に申し込む、頒価1部500円。)
 - ②各月第二土曜日 学校厚生会明石サンピア 午後3時～
(例会出席は自由です。出席したときは、会場代・茶菓代などとして1000円必要)
 - ③概ね年に一度、アクトス文学賞を選考・表彰

※携帯あるいはネットだけでの参加も可能です。 ※ペンネーム推奨。

作品の提出は、携帯メール(詩・短歌・俳句など)、パソコンメール(エッセイ・小説・紀行など)で行います。扱えない方は、相談させて頂いて郵送も可能とします。

例会後は懇親会、また旅行などもおこなっています。

運営は当分の間、例会などで相談・連絡の上、会長が決定しておこないます。

平成21年1月1日 アクトス会長 大西 亥一郎

連絡先: 〒673-0031

兵庫県明石市宮の上1の17の614 大西方 アクトス編集室

Tel&Fax 078-922-4562

メール: actos2008@mbe.nifty.com

◆HP <http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

[2009/11/7改訂]

◆合評会 毎月第二土曜日

※午後 3時～5時

◆場所 サンピア明石

〒673-0882

明石市相生町2丁目9番20号

TEL (078) 911-2250(代表)

FAX (078) 913-1140

JR・山電明石駅から南東へ徒歩約10分

市バス「保健センター前」下車すぐ

立体駐車場有(有料)

アクトス 第8号

平成二十二年十一月一日

編集 大西亥一郎

発行

673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社 「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)500円
